

The Years の或る結末

宮田裕三

言うまでもなく Woolf は瞬間を永続化させ、流動を固定化させることに芸術家としての使命を見出し、その作業に全力を投入してきた。つまり、epiphanic な体験によって得られる symbolic な充足 'moment of being' を life に於ける至上無比の宝と考え、そのまたたく間に消えてしまうような不安定で抛り所のない一瞬に継続性を付与することができるという彼女の信念には、少なくとも *Mrs Dalloway* や *To the Lighthouse* あたりまでは一点の曇りもないようであり、事実、作品は充足を湛えたまま閉じている。

この epiphany 信奉は当然 *The Waves* にも引き継がれて行くのであるが、このあたりから Woolf の信念に徐々にではあるが変化が生じていることがわかる。読者は作中人物による epiphanic な体験を断続的に目撃することができるのであるが、以前のように永続性が与えられることは決してないのである。しかも、主要な作中人物の1人である Bernard が "All changes."⁽¹⁾ と述べるように、この作品では moment に対する不信心や懐疑が表面化しており、このことと、この作品全体に覆い垂れ込めている重々しく、暗い雰囲気とはあながち無縁ではないように思われる。

ただ、瞬間を固定化することに懐疑的になったとしても、その作業に含まれていた真実は依然として Woolf を捉えて離さない魅力を有していた。即ち、個別的、一時的な現象を普遍的、永久的な真実にまで高めるという限りに於て、Woolf は依然としてこの永続性には固執しており、G. L. Dickinson に宛てた書簡の中でこう述べている。"But I did mean that in some vague way we are the same person, and not separate people. The six characters were supposed to be one. I'm getting old myself—I shall be fifty next year; and I come to feel more and more how difficult it is to collect oneself into one Virginia; even though the special Virginia in whose body I live for the mo-

ment is violently susceptible to all sorts of separate feelings. Therefore I wanted to give the sense of continuity ..."⁽²⁾ この 'continuity' が、作品の中で再三言及される 'meaning' や 'truth' の実体なのであるが、*The Years* に於ても、この継続性・永続性を模索しようとする意志が根強く働いており、その意味からこの作品が以前の作品群と一線を引いて考えなければならぬ特殊性を持っているとみなすことは不当であろう。むしろ、確実に *The Waves* の延長線上にあると言える。

The Years に関してまず注意を引くのは、中上流階級に属する一族 'Pargiter' 家3代にわたる歴史を chronological な構成で扱い、しかも人物像を Woolf がそれまで排斥していた conventional な方法、即ち 'externality'⁽³⁾ の側に徹して描いているということであろう。*The Waves* に至るまでの作品は、Woolf 自身の言葉を借りると、言わば 'vision'⁽⁴⁾ に属する世界であり、"Modern Fiction" という essay の中で宣言したように、それは人間の内部世界の微妙な揺らめきに目を向けた結果生み出されたものであるのに対し、*The Years* では、それまでとは正反対の方向へ進むかのように 'facts'⁽⁵⁾ だけの世界を描こうとしている。しかし、勿論、'vision' への意志をすっかり捨て去っている訳ではなく、両者をむしろ融合しようとしている。"But *The Pargiters*. I think this will be a terrific affair. I must be bold and adventurous. I want to give the whole of the present society — nothing less : facts as well as the vision. And to combine them both. I mean, *The Waves* going on simultaneously with *Night and Day*. Is this possible?"⁽⁶⁾

Woolf のこの大いなる野心は、しかしながら、しっかりと実を結んだとは言いがたいようである。

この作品は11にも及ぶ年代別の section に分れており、1880年から "Present Day" (1936年)に至るまでの数

十年にわたって、Pargiter 家の人々の人生にまつわる様々な事件、誕生、結婚、死、成功や失敗などの‘facts’で全体が埋め尽くされている。だが、それらが plot によって緊密に関連づけられた構成をとっているかということになると、実際はむしろその反対であって、この作品にかつて Woolf が批判した ‘externality’ の魅力を見出すことは不可能であろう。外側の事物の世界に回帰しようとしても、Woolf が ‘materialists’ と攻撃した realism の作家たちには遠く及ばない。Woolf はこの作品について、人生のすべての要素を盛り込んだ ‘Essay - Novel’⁽⁷⁾ であり、その全体の主要な雰囲気として ‘vitality, fruitfulness, energy’⁽⁸⁾ と述べているが、断片的な事実を継ぎはぎ状に並べただけの無味乾燥とした印象しか読者に与えないのが現実であろう。個々の独立した短編小説の集積とみなすこともできるが、その凡庸な印象を拭い取ることはできない。The Waves の底に流れていた不毛性の認識が、この作品をも侵食しており、以前にも増してその形跡が大きく浮かび上っているように見える。

このことを実証するかのようには、この作品は死に対する言及で満ちている。初めの section から最後に到るまで、ほとんどすべての section で読者は誰かの死に接するのである。最初の〈1880年〉では Pargiter 夫人、〈1891年〉では Parnell、〈1908年〉では Euginie と Digby、〈1910年〉では国王、〈1911年〉では Abel Pargiter、〈1913年〉では Crosby の老犬が死亡し、それ以後では第1次世界大戦によって世界そのものが崩壊の危機に瀕する訳で、Eleanor の言葉を使うと “the end of everything we cared for” (p.253)⁽⁹⁾ ということになる。このように形あるものが壊れ、意味を失って行く果てに現われる世界は、例えば最終 section の “Present Day” の party の場面で、次の世代を担う子供たちが歌う、“Etho passo tanno hai, / Fai donk to tu do, / Mai to, kai to, lai to see / Toh dom to tuh do -” (p.327) という意味を成さない奇妙な歌に象徴されているように、それこそ fruitless な不毛の世界なのである。そして、時間に押し流されるように無意味と崩壊へ向って行くベクトルを塞ぎ止め、意味と充足を再生産しようとする ‘vital’ な ‘energy’ を持ったベクトルをこの作品の中に見出すことはできないのである。

このように negative な方向しか指し示さない無意味な fact が堆く積まれて行く間、時折、Woolf 独特の visionary な特質が作中人物によって読者に呈示される。それは、self に対する異常な執着であって、この問題は Woolf の主要な作品に一貫して見ることのできるテーマ

である。self に関する問題は大きく2つに分類できる。1つは、self の不可解性（と必然的に他者の不可解性を含む）の問題であり、もう1つは、self の多様性（当然前者につながる）であろう。そして、この両者を The Years の中にも見出すことができるのである。

例えば、〈1880年〉の section で Eleanor が “Where am I? she asked herself, staring at a heavy frame. What is that? She seemed to be alone in the midst of nothingness.” (p.35) というように、indifferent な外界に向って個の所在を問いかける場面があるが、これを皮切りに様々な作中人物が、life とは何か、self とは何かという問いかけを発して行く。しかし、それらは一方的な問いかけであって、それに対して解答作業が試みられるということは決してない。従って、読者にはそれらの問いも各々の作中人物によるつぶやき、独り言程度にしか聞えない。そして何時の間にか “We know nothing, even about ourselves.” (p.325) という Eleanor の言葉が最終的な結論として読者に与えられるのである。

そして、この self の不可解性は self の多様性へと発展し、Maggie が “... Am I that, or am I this? Are we one, or are we separate ...” (p.108) と問いかけたり、Rose が自分を “two different people at the same time” (p.129) と思うように、作中人物によって self の分裂が意識されるのであるが、これも結局、最終 section の Eleanor の “My life’s been other people’s lives, Eleanor thought - my father’s; Morris’s; my friends’ lives; Nicholas’s.” (p.280) という言葉に収斂して行く。ubiquitous な self の存在を主張することによって、個の断片化と崩壊を食い止め、個に意味と普遍性を与えようとするのであるが、この時 memory が重要な役割を果たしている。memory によって過去と現在が混じり合い、或る連続性が生まれるからである。Eleanor によって “... she felt that she wanted to enclose the present moment; to make it stay; to fill it fuller and fuller, with the past, the present and the future, until it shone, whole, bright ...” (pp.325-326) というように Woolf の作品群に脈打って流れている visionary なテーマが示されるのであるが、それは決して実現されず、作品の中で2度と言及されることはない。vision は瞬時のうちに跡形もなく消え失せてしまう訳で、この作品では vision の不毛性、無力さが今までにないほど表面化している。そして、これは vision の有効性を信奉し、それを前面に押し出してきた作家にとって、きわめて皮肉な結末であったと言えるだ

ろう。

結局、一貫した持続性を持ち得るものは、subjective な vision ではなく、むしろ Woolf がかつて排斥した external な fact なのであって、このことは、例えば最終 section で Pargiter 家一族の人間が窓際に一列に立ち並ぶ場面によって示されている。“The group in the window, the men in their black-and-white evening dress, the women in their crimsons, golds and silvers, wore a statuesque air for a moment, as if they were carved in stone.” (p.329) 世代交代という、人間の原初的な永続性、継続性が、石のイメージによって確かなものとして示されている。この苛酷な真実は、Woolf の fact と vision を融合しようとする本来の意図を打ち破り、この作品では、vision が擦り切れた衣を引きずりながら無残な姿をさらけ出しているような痛々しさがひしひしと伝わってくる思いがする。vision によって個々の断片化した事象を統合し、一個の完全なる永続的な意味を創り出そうとして Woolf が描いてきた軌跡の1つの終着点がこの作品には示されていると言えよう。個の意識はそれを取り囲む外部世界の中へ呑み込まれて行き、決して乗り越えることはできない。これを暗示するかのように、“The sun had risen, and the sky above the houses wore an air of extraordinary beauty, simplicity and peace.” (p.331) という自然描写でこの作品は閉じているが、この ‘simplicity and peace’こそ、かつて *The Waves* の中で Bernard が体験し、そして敵対し続けた symbolical な死を体現しているものであろう。

註

- (1) V. Woolf, *The Waves* (Penguin), p.77.
- (2) *The Letter of V. Woolf*, vol. IV (Chatto & Windus), p.397.
- (3) V. Woolf, *A Writer's Diary* (Triad), p.185.
- (4) V. Woolf, *Ibid.*, p.184.
- (5) V. Woolf, *Ibid.*, p.185.
- (6) V. Woolf, *Ibid.*, p.192.
- (7) V. Woolf, *Ibid.*, p.184.
- (8) V. Woolf, *Ibid.*, p.250.
- (9) V. Woolf, *The Years* (Granada). 以下、同作品の頁数への言及はこの版による。